

Genius English Communication I

新しい時代の英語教育に向けた 新 *Genius I* の挑戦

村野井 仁



平成25年度から新しく始まる「コミュニケーション英語Ⅰ」。高校の先生方はどんな教科書が出てくるのか、興味津々なのではないだろうか。4技能を統合的に育て、理解の能力と表現の能力をバランスよく伸ばす。文法は言語活動と結びつけ、運用能力まで鍛える。そして英語の授業はなるべく英語で行う。これらの新学習指導要領の方針を新しい教科書がどう具現化してくるのか、ちょっぴり不安を感じながらも、ひょっとしたら何か新しいのが出てこないかと、期待されているのではないと思う。

Genius Communication English I (以下 *Genius I*) は、このような期待にどんと応えるため、以下の「挑戦」を試みている。

1. 人類共生にとって大切な題材内容

英語教科書の命は題材である。生きた題材、知的におもしろい題材を求めて編集チームは、2年数か月の間、悩みながらそしてもちろん楽しみながら教材候補をひたすら集めた。

題材探しにあたって私たちが大切にしたのは、いろいろな題材をなんの脈絡もなく教科書に「てんこ盛り」にするのではなく、これからの世界で生きていく若者たちにとって大切な意味を持つトピックに絞り込むことだった。

200本を超える教材候補を一つ一つ吟味し、私たちは最終的に以下の10のトピックを選定した。

Genius I で学び、考える10のトピック

A. 世界の姿 (A Village of One Hundred)

- B. 教育の大切さ・国際協力 (Three Cups of Tea)
- C. 日本の文化 (More Than Just a Piece of Cloth)
- D. 環境を守る (Borneo's Moment of Truth)
- E. 命 (Alex's Lemonade Stand)
- F. 脳の不思議さ (Magic and the Brain)
- G. スポーツへの情熱 (Mother of Women's Judo)
- H. 水と私たち (Water Crisis)
- I. フェアトレード (Coffee and Fair Trade)
- J. 戦争と信念 (Life in a Jar)

*カッコ内は本課のタイトル

これらのトピックは、グローバル・イシュー (global issues) と一括りにすることもできるかもしれないが、何と呼ばれようとも、英語を身につけ世界のいろいろな人々と分かりあって共に生きていこうとするならば、どれも知っておきたい、そして、人が人らしく生きていく上で一度は考えておきたいトピックである。地球村に住む人類の多様性と人類が直面する課題、学ぶことの大切さとそれを支える国際協力活動、風呂敷に包まれる思いやりの文化、貧困から来る環境破壊とそれを食い止めようとする人間の英知、病気と闘う少女の姿とそれを支える人々とのつながり、マジックを通して見える人間の認知活動の不思議さ、女性柔道家のスポーツへの情熱と性差別との闘い、身近に迫る水不足の現状と科学技術、生産者と消費者を守る公平で公正な貿易、強い信念から多くの人の命を救った女性の物語。すべて「へー、そんなことがあるんだ！ そんなすごい人たちがいるんだ！」と驚くような発見と学びに満ちた

本課10点を取り揃えている。

2. 自律的な多読を促す Read On!

上記の10のトピックに関する本課に加え、新機軸として、本課と同じトピックまたは関連するトピックを扱った英文を10編載せている。従来、2, 3レッスンごとに1つ置かれていた読解中心の長文を、すべての本課に対して共通のトピックで付随させるという豪華な構成になっている。読解力を育てるには、どんどん読みたいという気持ちを育てて、たくさん読ませるのが最も効果的であり、そのような読解指導を1冊の教科書で可能にしたいという欲張りな気持ちを形に現したのが Read On! である。

Read On! は、なるべく生徒が独力で読めるように、手厚い傍注を付け、多読・速読の力、読みを愉しむ姿勢を育てることをねらっている。

原文の書き直しは最低限に留め、生の題材 (authentic material) に近いものに触れられるよう配慮しているのも Read On! の特徴である。

3. 理解・表現活動と調べ・考える活動の融合

内容がどんなに良くても、教科書本文を読んで理解して終わり、というような授業ではせっかくの教材を十分に活かすことはできない。

教科書の内容について聞くこと、読むことによって理解し、自分がその話題に対してどのような態度を取るのか自分の頭で考え、自分の考えや理解したことの概要を他者に伝え、共有し合えるように生徒にはなってほしい。そのような理解活動と表現活動がうまく融合したダイナミックな授業を先生方には展開してほしい。そんな願いをかなえるために *Genius I* には以下のような工夫が凝らされている。

① コンセプト・マップを使った要約活動

理解した内容を英語で他者に伝える story retelling や summarizing などのアウトプット活

動は英語運用能力を高める上で効果的であることが知られている。*Genius I* では各単元末に Communication Activities の1つとして、要約活動を入れている。本文のキーワードを用いて、本文の概要を図示したコンセプト・マップを用意しているので、生徒たちはそれを土台にして英語での要約ができるようになっている (図1 参照)。

生徒たちは、このようなコンセプト・マップの語句を手がかりにして、あらすじを英語で文章化していくわけであるが、読解活動そして音読活動をしっかり行った後であれば、それほど負担なく要約ができるのではないかと考えている。

② 他者との協同学習を促す Discussion

それぞれのトピックに関して生徒が自分の考えをまとめられるように Discussion Points を各章に設けている (図2 参照)。ペアワークやグループワークによって、お互いの考えを紹介し合い、意見の交換や議論が導かれるようになっている。

③ 「調べ学習」を促す Project

Communication Activities の最後の活動は Project である。これは、各章のトピックについて

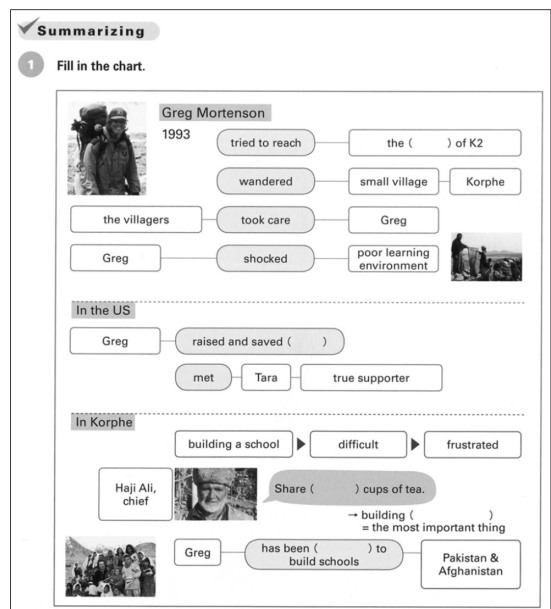


図1 コンセプト・マップの例
(Lesson 2: Three Cups of Tea)

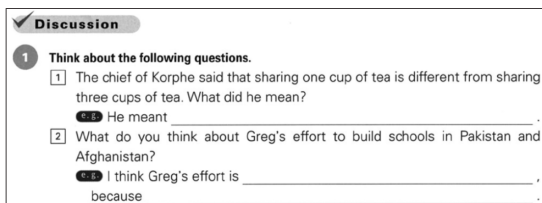


図2 Discussion Points (Lesson 2)

てさらに深く、あるいは別の角度から自分で情報を集め、それを英語でまとめて伝えようというものである。いわゆる「調べ学習」(research)を行い、調べたことを紹介し合う活動になる。各自が情報を持ち寄り、それをグループで統合してレポートやプレゼンテーションとしてまとめ上げる協同学習をねらった活動である。

例えば、Lesson 10 では単元の背景となっているホロコーストの歴史について調べるプロジェクトが用意されている。

4. 文法運用力を高める Grammar Points と Give It a Try

各レッスンには高校で習得すべき文法事項が配置されている。本課の内容に合わせて自然な形で目標文法事項を学べるようになっている。

文法について最も特徴的なのは、単元の最後に単に文法の構造や例文の記述を載せるだけではなく、言語形式を意味や機能を考えながら操作する力を伸ばす Practice があり、さらに、より実際の言語使用場面に近い形で文法運用を求める Give It a Try が用意されていることである。これは、文脈化されたドリル (contextualized drill) であり、段階的に文法を使いこなす能力を高めるために有効である。文法を言語活動と結び付けて指導する1つの方法を提案している。

5. 内容・言語統合型学習を可能にする教科書

このように見ていくと、Genius I が目指しているのは、大切な内容について学び、ことばを理解し、表現する力を育てることに加え、考えた

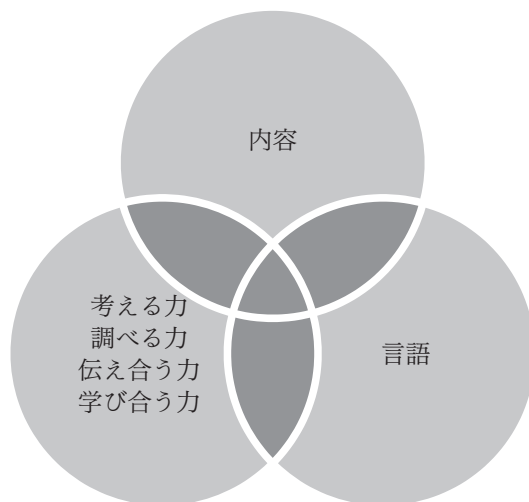


図3 内容言語統合学習の枠組み

り、調べたりする力も育てることであることが分かりいただけると思う。それを学習者一人ではなく、他者と共に力を合わせて行う機会を作り出すことをねらっている。

このような外国語学習への総合的・協同的なアプローチは、近年特にヨーロッパで実践が深められている内容言語統合学習 (Content and Language Integrated Learning/ CLIL) と軸を同じにするものである。

図3が示すように、内容と言語の学習に加え、生きる力としての考える力、調べる力、伝え合う力、学び合う力を総合的に育むことを外国語の授業で目指すのが、CLIL である。ここでは、授業は人間を全人格的に育てる活動になる。そんな外国語教育を日本の英語教室で少しずつでもいいからやってみたいと思う先生に、Genius I を使っていただきたいと心から願っている。

このような工夫を思い切って盛り込んだ Genius I, 先生方の熱いご期待に応えられるだろうか。こんなふうに教えられたらきっと授業は楽しく、意義深いものになる。そんなことを思いながら作り出した私たち編集チームの「挑戦」である。

(むらのい ひとし・東北学院大学教授)